

アフリカと双子文化複合

小馬 徹

アフリカ各地の双子をめぐる慣行と観念複合をその内部から理解する鍵は、シンボリズムとコスモロジーにある。この面では、考察の糸口を得るために、思い切って地理的・歴史的な繋がりの薄い地域と比較対照してみるのも一つの有効な方法となる。そこで、レヴィ＝ストロース [Lévi-Strauss, C., *Myth and Meaning*, 1978] を案内役として、南北アメリカ大陸に広く分布する双子のシンボリズムを参照しよう。

双子、逆子、兎唇

16世紀のペルーのある地域では、厳しい寒波に見舞われると、逆子だった者、兎唇の者、および双子を僧侶が呼び集め、お前たちが唐芥子と塩を食べたせいでこうなったのだと難詰し、悔悟して罪を告白せよと責めたてたという。レヴィ＝ストロースは、スペイン人宣教師アリアガが残したこの記録をまず紹介している。そのうえで、異常気象が双子と結び付けられる事は世界中でままある事だとしても、ここでは逆子、兎唇の者、双子の三者がなぜ一まとめにされているのだろうか、と問いを発している。

彼は、南北アメリカ大陸の双子の伝承では、双子〔として最初に示された者〕が後には銘々の運命に導かれて別々の境涯を辿り、いわば双子ではなくなるという断裂が共通の基本的特徴となっている事を見いだす。そして、以下のように、この断裂は割れた唇という兎の解剖学的な特徴と密接な関係をもっていると述べる。

ある話形では、騙されてトリックスター（いたずら者）と交わってそれぞれが男の子（擬似的な「双子」同士）を産んだ姉妹の陰部（裂け目）を覗き見た兎が卑猥な冗談を言い、姉妹に杖で打たれて鼻先と唇が裂けてしまう。もし兎の体の裂け目を尾まで延ばせば、姉妹は兎を双子へと変成させる事になったはずだ。実際、南

北アメリカのインディオ（インディアン）は、やがて凝り固まって子供となる妊婦の胎内の体液が分断されると双子になるので、妊婦は急に寝返りをうってはならないのだと考えている。

兎唇が双子の端緒だというこの観念は、双子・逆子・兎唇の間の繋がりを明かす。神話では、母胎内の双子は先に生まれる名誉を得ようと競い合い、悪い方の胎児が母親の体を傷つけて不自然な裂け目を作り、そこから脱出しようとする。この〔母体にとっては〕危険で〔子供にとっては〕英雄的な脱出―やがてその子供が英雄になる―の共通性が、双子と逆子を結び付ける。英雄は時として破壊者であり、殺戮者ともなる。だから、英雄の出現を防ごうとして、双子や逆子を嬰兒の内に殺す部族もあったのだ。

伝承では、双子は騙されて神とトリックスターの種を同時に宿した女性が産むとされたり、太陽と月の起源神話に結び付けられたりしている。兎（齧歯類の代表）とは、唇が裂けて双子になりかけている存在である。だから、先に見た「断裂」のゆえに、善と悪、太陽と月、宇宙の秩序を体現する神と滑稽な道化など、両極的な存在として描かれる双子の両面を一身に併せ持っている。そして、裂け目が象徴するこの両義性のゆえに、兎は北アメリカの幾つかの部族の伝承で最高神の位置を与えられているのだ。

双子のパラドックス

レヴィ＝ストロースの力業ともいべきこの構造論的「双子論」は興味深いもので、我々を同様の試みに誘うだろう。アフリカ各地の伝承でも、確かに兎はトリックスターとして大活躍するし、しばしば文化英雄の地位を与えられている。また、逆子を双子と同等かそれに準じた存在として扱う慣行は、アフリカでも普通に見られる。しかしながら、双子を兎や兎唇と結

び付ける観念がアフリカに存在する事を、私は寡聞にして知らない。つまり、レヴィ＝ストロースが南北アメリカ大陸の伝承を見渡して結び付けてみせた「双子・逆子・兎（唇）」の三角形が、アフリカでは描けないのである。

ところで、アフリカの諸事例に依拠した、しかもより普遍性の高い「双子論」の試みを、V. ターナーがある著作で展開している。そこで、次にこれを見てみよう。

シャペラは、親族が重要で、人間関係や社会的な地位の構造化の主要な枠組みの一つであるような社会ではどこでも、双子が分類上の問題を引き起こす事に注目する。ターナーはシャペラに同意し、アフリカで広くみられる通り、それは双子（などの多胎児）が神秘的に同一だと考えられる一方で、家族や親族集団で双子の占めるべき座がただ一つだからだという。兄弟の生まれ順も重要で、兄は往々弟に優越し、弟に対してある種の権利を行使しさえする。つまり、双子は肉体的には二つだが構造的には単一であり、神秘的には一つでも経験的には二つであるというパラドックスをもたらすのである [Turner, V. W., *Ritual Process*, 1969]。

親族が重要な社会は、このパラドックスを何らかの方法で解決しなければならないのだ。

パラドックスへの対処

ターナーは、双子の出産に対して親族社会ができることは二つだという。これを、いわば、生まれて初めてキリンを見た子供の状況に譬える事ができる。こんなものは信じられないと、その生理的な事実が社会に存在すること自体を否定するか、あるいは逆に、事実を事実として受け入れたうえで対処しようとするかである。

最初の選択は、双子のパラドックスが存在する事態を否定する事。それには、双子の一方、または両方を抹殺すればいい。かつてブッシュマンがそうした事が知られている。双子（の一方）を死に至らしめる事は、アフリカの多くの社会で行われた。その場合、双子は不幸を背

負った者、あるいは親族や共同体に不幸をもたらす者、つまり「共同体の負担」として象徴的に表現される事が多くなる。ターナーは、経済的な側面にも目を向け、家畜を飼わない社会では、双子が満足に育つ事は困難だと述べた。

第二の選択、つまり双子のパラドックスの存在を認めて対処するには、出来ればその事実が文化の他の側面と調和するように見せかける方が望ましい。往々なされるのは、双子を抹殺する代わりに、双子が生まれによって帰属するはずであった血縁組織から除外して、彼らに特別の社会的な身分を与える事である [ibid.]。

既に紹介した通り、双子やその次に生まれた子供は、ターナーが調査したコンゴ民主共和国のンデンプ人では呪医に、西アフリカのキッシン人では占い師になる事が多かった。ウガンダでは王は双子だとされて二組の双子の父親という称号をもち、また双子の父親は遠征の義務を免除された。ガーナのアシャンティでは双子が王に、アンゴラのオヴィムブンドゥでは三つ子の一人が最高首長に差し出された。また、カメルーンのバムンでは奴隷に生まれた双子が王の養子になったのである。これらは皆相同の現象だ。

さて、我々はアシャンティの王族の間に生まれた双子が殺されたという、上の諸例とは逆方向の事実を考察できる地点に漸く出た。一つの仮説は、双子のパラドックスに対して、王族と平民の二つの階層で別々の対処方が採られたと見るもの。王族ではパラドックスが排除され、平民では本来の帰属階層から他方（王族）へと排除されたのだ。もう一つは、双子が相互に他方の帰属階層へと排除され、王族の双子は奴隷という新たな属性のゆえに生殺与奪の権を握られて殺された、と見るもの。とりあえず、第一の仮説が穏当か。アシャンティの母系の王族に限らず、王位継承権などをめぐって、世界中どこでも、王や首長の一族の間では双子のパラドックスは遥かに深刻なのだから。

（こんま とおる 神奈川大学 社会人類学）